



第27回 東京弁護士会人権賞 受賞

故 原田正純氏の足跡

公害・環境特別委員会元委員長

中杉 喜代司 (35 期)

1 水俣病研究の第一人者

第27回東京弁護士会人権賞を受賞された原田正純医師は、水俣病研究の第一人者として広く世に知られた方で、2012年6月11日に77歳で逝去された際にもテレビの追悼番組をはじめ、多くの報道がなされた。

原田医師は、出身の熊本大学体質医学研究所助教授を経て、1999年に熊本学園大学社会福祉学部教授に就任された。

原田医師の研究・業績は、わが国の水俣病にとどまらず、カナダ・中国・ブラジルなどの世界中の水銀中毒症、三井三池炭鉱事故による一酸化炭素中毒症、カネミ油症、土呂久のヒ素中毒、ベトナムの枯葉剤被害など、実に多岐にわたるものである。

2 胎児性水俣病の究明

中でも水俣病については、1961年から亡くなるまで調査と研究を続け、多くの出版等によって世論を喚起し続けた。とりわけ胎児性水俣病の研究と「熊本大学医学部10年後の水俣病研究」などにおける水俣病の病像の解明は特筆すべきものである。

原田医師は、「胎盤は毒物を通さない」という当時の学界の常識を覆し、母親の胎内で水銀に侵されて起こる胎児性水俣病の存在を立証した。原田医師は、徹底した現場主義を採り、何より被害者の話に耳を傾け、「患者に学ぶ」姿勢を貫き、胎児性水俣病も被害者らの話から発した研究であった。

また、原田医師は、1971年から実施された約3500名の調査を始め、多くの住民調査を行って被害実態を明らかにした。2009年の秋にも約1000名の大検診を提唱して、水俣病の公式確認から50年以上も経過した現在でも、未だに多くの被害者がいることを世の中に訴えた。

3 「水俣学」を提唱

原田医師は、単に医学の立場から水俣病を見るのではなく、多彩な学問分野、専門家と素人の壁を越えて、水俣病の歴史から学際的に教訓を学ぶ「水俣学」を提唱し、カナダやブラジルなど世界の水銀汚染の調査経験を踏まえ、2006年に熊本学園大学で開催された「環境被害に関する国際フォーラム」のほか、多くの研究会の開催など様々な教育・研究活動を行った。

4 多岐にわたる業績

水俣病以外にも、原田医師は、1963年に発生した三井三池炭鉱の炭塵爆発事故では、一酸化炭素中毒患者を40年間追跡し、「後遺症はほぼない」とする通説の誤りを正した。食品公害のカネミ油症でも、長崎県五島市などで被害調査を実施して、患者の救済を世論に訴えた。ベトナム戦争で散布された枯葉剤被害の日越共同研究の代表を務め、1988～89年に地元の医師とともに7400名以上の住民健康調査を行い、枯葉剤被害の実態を明らかにした。

5 常に公害患者に寄り添って

原田医師は、第3次水俣病訴訟や第2次新潟水俣病訴訟などの訴訟において水俣病の病像等について証言したほか、カネミ油症新認定訴訟においても証言するなど、常に被害者の立場に立って被害救済に大きな貢献をした。さらに、2011年3月の福島第一原発事故の被害救済についても、「水俣の教訓を福島にどう生かすか」という観点から多くの発言を行い、昨年亡くなるまで、常に公害患者に寄り添ってその被害救済に尽力された。